第十七条　長く云まじき字

底本：高知本　対校本：なし

【翻刻】

第十七　長く云ましき字

なかくいふましき文字の曲ハ、たとへは、「春さめ」の「め」の字、「村雨」の「め」の字、「さゝめこと」の「め」の字、「うねめ」の「め」の字、「しのゝめ」の「め」の字、「こさめ」の「め」の字、「あやめ」の「め」の字、「いとめ」の「め」の字。此類也。

「よるへ」の「へ」の字、「あしへ」の「へ」の字、「春辺」の「へ」の字、「さわへ」の「へ」の字、「いそへ」の「へ」の字、「わたなへ」の「へ」の字、「おかへ」の「へ」の字、「野へ」の「へ」の字、此類。また「つらきもの」、「つ」の字、「井つゝ」の「つ」の字、「あきつ」の「つ」の字、「つゐの道」の「つ」の字、「松むし」の「つ」の字、「つゝりさせ」の「つ」の字、「きつね」の「つ」の字、「つぎのふ」の「つ」の字、此類也。又、「たゝのふ」の「ふ」の字、「しのふ」の「ふ」の字、「しやうふ」の「ふ」の字。

右の文字いつれの謡にても、かろくそとあたつて云へし。長くのびたるを殊外いやしむ事にて御座候。

此外又、「とたか」の三字ハきめつけて吉。「べう」の二字はかろくうつくしくいふ也。これもあまりかろきハ、か

へつてしたるく也申候。心得被成候へ。
たんちんつんてんとん、なんにんぬんねんのん、
らんりんるんれんろん、はんひんふんへんほん、
此はね字ハ何れの所にても、いかにも舌のさきにかけてつよやかに云へき也。なまあたりなれハ曲そらくになり、字性正敷からす。うたひとめはの「てには」の文字「に けり」「そ ける」「こそ けれ」「やらん」。

【校異】

対校本なし。

【現代語訳】

第十七　伸ばして発音してはいけない文字

伸ばして発音してはいけない文字を含む曲（ふし）は、たとえば、

春雨（「め」の字）、村雨（「め」の字）、ささめごと（「め」の字）、采女（「め」の字）、しののめ（「め」の字）、小雨（「め」の字）、あやめ（「め」の字）、いとめ（「め」の字）の類である。

よるべ（「べ」の字）、あしべ（「べ」の字）、春辺（「べ」の字）、沢辺（「べ」の字）、磯辺（「べ」の字）、渡辺（「べ」の字）、岡部（「べ」の字）、野辺（「べ」の字）の類である。また、

つらきものの（「つ」の字）、井筒（「つ」の字）、あきつ（「つ」の字）、終の道（「つ」の字）、松虫（「つ」の字）、つづりさせ（「つ」の字）、きつね（「つ」の字）、継信（「つ」の字）の類である。さらに、

忠信（「ぶ」の字）、忍ぶ（「ぶ」の字）、菖蒲（「ぶ」の字）。

右の文字は、謡う際には常に軽くそっと、［唇に］当てて発声しなければならない。長く延びることをことのほか蔑むということでございます。これ以外にも、「とたか」の三字は叱りつけるように発音するのが良い。「べう」の二字は軽く美しく発音する。ただし、あまりに軽いと逆にしまりがない。よくご理解ください。

たんちんつんてんとん、なんにんぬんねんのん、

らんりんるんれんろん、はんひんふんへんほん、

これらのはね字は、どこに出てきても、できるだけ舌の先に引っかけて、強い感じで発音しなければならない。当たりが不十分だとふしがぞんざいになる。文字の特性が正しく発音できない。謡止め場の「てにをは」が、「にけり」「ぞける」「こそけれ」「やらん」なのは、周知のことではないか。

【解説】

この項は「文字うつり」とも関連する。

鼻音や破裂音と母音から構成される音は、長く伸ばして発音すると、徐々に母音が浮かび上がる。まず、語末の「め」、「べ」、「ぶ」、「つ」に関して、伸ばして発音することが戒められる。また、「と」、「た」、「か」に関して、きっぱりと発音することが説かれる。現代関西方言では一音節語が長音化する傾向がある（例えば「目」を「めー」と発音するなど）。『うたひ鏡』が執筆された時代にも、同じようなことが頻繁にあったのかもしれない。なお、「め」、「べ」、「ぶ」、「つ」は、『謡曲拾穂鈔』貞享四年（一六八七年）の「第十七　長いふましき字の曲の事」や、『五音観世道見書物』（奥に永正元（一五〇四年）と記載）の「第十七　長いふましき字の曲」にも言及がある。節を例示するために列挙されている個所はほぼ等しく、同様の対処法が提案されている。

「べう」は美しく発音することが求められる。古語の「美し」は、可愛い、美しい、壮麗だなど、広い意味を持ち、必ずしも現代日本語の「美しい」と等しいとは限らない。金田一は、肉親の情愛の気持が原義で、平安時代には「小さいものをかわいいと眺める気持」が生じて「美意識が発生」し、中世にはいると「『美しい』の意」となったと述べ、中世から近世にかけては、「さっぱりしている。きれいだ」のような意味もあったと補足する。[1] その他、「べう」は軽くなることも戒められる。

なお、宝暦十二年（一七六二年）に出版された『音曲玉淵集』の影印本は「べう」ではなく「べら」と記す。また、同書は続けて「ら［ママ］ノ字は（あかさたなはまやらわ）の内なれは」と記す。「べう」のつもりで「べら」と誤記したとは考えにくい。おそらく一八世紀の中頃には、「べう」の伝承は、すくなくとも『音曲玉淵集』にかかわる謡曲家達の間では、失われていたと推察される。

最後に、五十音のタ行、ナ行、ラ行、ハ行の音の後に「ん」が続く事例が整理される。『謡曲拾穂鈔』及び『五音　観世道見書物』には、タ行、ナ行、ラ行が記載される。他方『うたひ鏡』は、これにハ行が付け加わる。タ行、ナ行、ラ行、ハ行が記された伝書類から引かれた可能性を否定することはできないものの、むしろ過去の文献を踏まえたうえで独自の見解を示そうとしたのではないだろうか。

はね字の調音の失敗に関して、『謡曲拾穂鈔』では聴き取れない、『五音　観世道見書物』では意味がわからなくなると記される一方、『うたひ鏡』は「文字の特性が正しく発音できない」と記す。はね字に関して聞き手の評価からではなく、謡い手の技術から考察し、理論を模索していたのかもしれない。今後の研究を待ちたい。

曲（ふし）の発音は謡う際に避けて通れない重要な問題であり、『音曲玉淵集』、『謡花伝書』、『謡の秘書』等々、多くの伝書類にも言及が認められる。ただし、説明方法は一様でない。たとえば、五十音への言及に差がある。『謡花伝書』や『謡の秘書』には注意すべき文字が幾つか示されている一方、『音曲玉淵集』は五十音図に基づいて記述される。『うたひ鏡』は、「（あかさたなはまやらわ）の内なれは」という記述から、五十音図への理解が認められる一方で、旧来の

「とたか」という文字を単位とした発音の議論も含む。伝承されてきた発音知識を五十音図で再編しようとする工夫がうかがわれる。

【資料】

一　文字（モジ）うつり　是ハ何にても文字を引候へハあとに一字つゝ字をうむ物なり　たとへばらの字を長く引候へはあの字出き　たとへハさひしき道すがら秋のかなしミと云所らの字を引あの字を云にをよばさるや

193-47〔謡花伝書〕イ11-00317-001 ～ 002　18表　「早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点共同研究成果報告書　謡伝書の具体的理解と体系的把握へ向けた基礎作業」に基づく

(https://rcjtm.kcua.ac.jp/pub/2017web/archives/resarc/utai/index.html)。

一　とたかの三字ハ皆きめてよし

一　べうの二字ハうつくしくよハかるへし

193-47〔謡花伝書〕イ11-00317-001 ～ 002　29裏　「早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点共同研究成果報告書　謡伝書の具体的理解と体系的把握へ向けた基礎作業」に基づく

(https://rcjtm.kcua.ac.jp/pub/2017web/archives/resarc/utai/index.html)。

一　とたかの三字ハきめ候てよし　へうの二字ハうつくしくよハかるへし

193-57〔謡の秘書〕イ11-00349　18丁表　「早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点共同研究成果報告書　謡伝書の具体的理解と体系的把握へ向けた基礎作業」に基づく

(https://rcjtm.kcua.ac.jp/pub/2017web/archives/resarc/utai/index.html)。

一　古き書に［とたか］の三字きめていふへしと有是はあなかちきめるにはあらす［たか］の字（あかさたなはまやらわ）の所に記す如し［と］の仮名和らかに唱へては浮上りて悪し唇にて少実を入ていふへし

『音曲玉淵集　一』時中庚妥編、今村義福補、大和田建樹訂、江島伊兵衛、一八九九年、五〇―五一頁。

古書に［びめぶ］の三字ト［べら］［ママ］の二字ハうつくしく軽くいふへしと有　但是ハ長からぬやうにいふへしびぶべノ三字ハはひふへほノ濁音の所に記ス

ら［ママ］ノ字ハ（あかさたなはまやらわ）の内なれは長からぬやうにしめて唱ふへし軽きハ却て浮やうに成へし

めノ字ハ（あけせてねへめえれゑ）の内なれは前に記如く和かに扱ふへし

三浦庚妥『音曲玉淵集』浜田敦編・開題、臨川書店、一九七五年、七三―七四頁（今村義福蔵版、浪華書舗刊、宝暦一二年の影印本）。

たん　ちん　つん　てん　とん　なん　にん　ぬん　ねん　のん　らん　りん　るん　れん　ろん

右此文字ハいかにも〳〵したのさきにかけてつよくしたにあたつて云べき也。はね字ハなまあたりなれはそらくに聞て文字のハけ聞えぬなり。

『五音　観世道見書物』（法政大学能楽研究所般若窟文庫蔵）※奥に「永正元　正月吉日　観世道見在判」。

タン　チン　ツン　テン　トン　ナン　ニン　ヌン　ネン　ノン

ラン　リン　ルン　レン　ロン

此文字ハいかにも〳〵したのさきにかけてつよくしたにあたつていふへき也。はね字ハなま当りなれハ文字聞えすしてたか〳〵からす。

『謡曲拾穂鈔』中巻、中村五兵衛、一六八七年。

※『謡曲拾穂鈔』、『五音　観世道見書物』は高橋葉子氏の御教示による。

注

（1）『新明解古語辞典　第三版』金田一春彦、三省堂編集所共編、三省堂、一九九八年、一五六頁。

（上野　正章）